

「タイ・フィールド調査研修参加報告書」

京都大学大学院

文学研究科修士2年 額田聖菜

① 学習成果

今回の研修では京都大学側・受け入れ大学であるタマサート大学側も東南アジア・東アジアを中心に多国籍出身者が多く、大学のグローバル化の現状を知り、また自分がグローバルな環境での身のこなしを修得していないと感じた。例えば、宗教の違いで食事制限やしてはいけないことがあることまで思い至らないことがあり、相手に申し訳なく感じた。また、京大側の参加学生から日本のことについて質問されることが多かったが、日本のホームレス事情など把握していないこともあり、自分の無知さを改めて実感した。グローバルな環境下では、他国や多文化に対する知識・自国や自国文化に対する知識を持ち、柔軟に行動しなければならないと強く思った。また一方で、日本の大学である京都大学を代表しての訪問であったのに、日本人学生は3人のみであり、このようなグローバルな場に身を置く日本人の少なさを残念に思った。

② 海外での経験

研修中は、参加学生が多国籍であったことから常に英語を用いることとなった。しかし、考えがまとまっていないことや、新しく考えたことを話そうとするとまったく英語が出てこず、大変苦労した。英語のネイティブスピーカーがほぼ居ない中でも、「英語」は第一のコミュニケーション・ツールであると感じた。また他の学生は他国の言語の知識も多く持っており、会話の中で相手の国のことばを交えたりしており、そういったコミュニケーションの仕方に非常に興味を持った。

これまでフィリピンに深く関わってきたが、フィリピンとタイでは状況が大きく異なり、「東南アジア」とひとくくりにはできないと感じた。タイは都会には高層ビルが多く並び、交通状況もよく、安全であり、発展した国であると感じた。しかし、農村部での暮らしぶりの違いや路上のマーケットとモール、デパートなどでの額面の差に、タイ国内の大きな格差を感じた。

③ プログラム内容

本プログラムはチェンマイパートとバンコクパートの2つに分けられる。

チェンマイでは、チェンマイ大学でのチャオプラヤー川流域での sustainable development に関する講義と学生ワークショップ、有機栽培農園の訪問、BOI への訪問と日系企業である Fujikura の工場見学などを行った。日系企業の訪問では、当初通訳を担当する予定であったが、専門用語も多く、また経済に馴染みがないこともあり、結局通訳を行うことができず悔しく思った。

バンコクでは、タマサート大学とチュラロンコン大学との合同ワークショップを中心に、3日間のフィールド・トリップがあった。ワークショップでは、初めて moderator を経験したが、こちらもタイムマネジメントやコメントなどに大きく苦戦したがよい経験になった。フィールド・トリップでは、1日目にアグリツーリズムの現場である Maha Sawat Canel 地域へ行き、タイの農村での暮らしと農村部での経済を知ることができた。2日目には4つの異なる宗教施設（ヒンドゥー寺院、モスク、カトリック教会、観音堂）を見学し、1つの地区に4つ以上の異なる宗教施設が共存しているところに、タイの多文化共生を目の当たりにした。FAO、UNIDO などの国際機関やタイ国外務省や子ども青年部などへの訪問も行い、学問がどのように行政機関での実践活動につながるのかを知ることができた。

④ 進路への影響

わたしは在日フィリピン移民の研究を行っているが、タイでたくさんのフィリピン人学生と会い、話をする中で、改めてフィリピン人のグローバルさを感じるに至った。今回特に多国籍の学生の中に身を置いたこともあ

り、他国で暮らすことがますますあたりまえになってきていると感じ、移民研究の重要性を再確認した。

また、タイでも活気ある人々の姿と、圧倒的な経済格差・貧困を目にする機会があり、その2つが混在するところに強く惹かれている。将来研究職に進むのか、就職するのかについてはまだ決めていないが、東南アジアに関わっていきたいという思いを新たにした。